

漢語「変化」の意味用法

— 漢籍・仏典との比較 —

柚木 靖史

一 研究の目的

「変化」という漢字漢語は、「へんげ」という呉音で「神仏・天人などが仮に人間の姿になって現われること」「動物などが姿を変えて現われること」という意味を表し、「へんか」という漢音で「ある性質・状態などが他の性質や状態に変わること」という意味を表す。この説明は、複数の国語辞書で確かめても、ほぼ同じ記述がされる。以下、『日本国語大辞典』（小学館）から、「へんげ」「へんか」の項の説明を記す。（紙面の都合上、意味の記述のみを示し、用例等は省いた。）

○へんげ【変化】《名》〔げ〕は「化」の呉音 ①神仏・天人などが仮に人間の姿になって現われること。また、そのもの。神仏の化身（けしん）。権化（ごんげ）。（以下、ここ

では用例を略す）②動物などが姿を変えて現われること。また、その物。化け物。妖怪。変化物。（以下、ここでは用例を略す）③神変不可思議な現象（以下、ここでは用例を略す）④「へんか（変化）①」に同じ。

○へんか・クワ【変化】《名》①ある性質・状態などが他の性質や状態に変わること。また、変えること。へんげ。（以下、ここでは用例を略す）②文法で、同一の語が用法に応じて語形を変えること。格変化、語尾変化など。③囲碁や将棋で、盤上にあらわれないが、想定される打ち手、またはさし手。また、一つの着手によって必然的に生ずる幾通りかの打ち方やさし方。

さて、このうち、「神仏・天人などが仮に人間の姿になって現われること」という意味の「変化」は、平安時代の和文にも散見される。

「そよ。その工匠たくみも絵師もいかでか心にはかなふべきわざならん。近き世に花降たくみらせたる工匠たくみもはべりけるを、さやうなる変化へんげの人もがな」と、とざまかうざまに、忘れん方なきよしを、⑤ 宿木 49頁4行目⁽¹⁾

なお、『源氏物語』では、「変化」という漢字表記はされず、「へんくゑ」「へんけ」「へむけ」「へん化」「へ化」のように表記される。『源氏物語』の「変化」は呉音であり、先の国語辞書の記述と照らし合わせれば、「①神仏・天人などが仮に人間の姿になつて現われること。また、そのもの。神仏の化身(けしん)。権化(ごんげ)。「②動物などが姿を変えて現われること。また、その物。化け物。」の意味だということになる。『源氏物語』の「変化」の意味については、後に確認する。「化」の音を「け」「くゑ」とするのは、合拗音のうち、特にエ段音の表記が、底本の書写時期である中世においては、すでに乱れていたことと関りがある。本稿では、「変化」を仮名で表記するときは、「へんくゑ」で統一する。

さて、『源氏物語』の表記に「変化」がないことから、仮名表記「へんくゑ」が変化という漢語を書き表しているかどうかということが問題となるが、この点は、源氏物語古注釈の表記から推して、「変化」という漢語を表記したと考えてよいであろう。

〈源氏物語の古注釈の「変化」〉

- ・きつねの人にへんけすると 変化 紫明抄卷十 174下
- ・へんくゑ 変化 四生中化生の心歎 河海抄十三 476上
- ・へんけの人もかな 変化 河海抄十八 ひたのたくみがこと也云々 飛驒匠 570下
- ・変化する 花鳥余情第9 117上
- ・変化する 花鳥余情第30 340上
- ・変化シテ 幻中類林 23オ1
- ・身をはへんげの物とおぼせ 身をやつしけるといふもへんげの心也 変化といふは仏菩薩の願力或は定力によりて善悪の業を感じてかりに形を現ずる事あり 一葉集 311上・13

古辞書類では、『色葉字類抄』に「へんクワ」の読みを載せる。⁽²⁾ 文明本節用集には、「へんゲ」(二一六丁5行目)「へんクワ」(七二〇丁4行目)という漢音と呉音の読みを載せる。⁽³⁾ ただし、「へんクワ」は、「其天ソラシメキ時トキ変化ヘンゲ自然シゼン乎カ」とあるように漢文の字句中にある「変化」の傍訓として載せられており、ここでの「変化」の意味は、「移り変わること」という意味である。さらに邦訳日葡辞書には、「Fenque へんゲ(変化) 他の物の姿に化けること。Fenqueno mono (変化の者) 狐の姿に化けた悪魔などのように、変身したもの Tengu qicumeni fenque sutu (天狗狐に変化する) 悪魔が狐の姿をよる」⁽⁴⁾ 「Fenqua へ

ンクワ（変化）国や所領などの変化、また、時と場合の変化に従って、計画や策略を変更すること。」とある。この説明によると「ヘンゲ」と「ヘンクワ」は別の意味として認識されているといえよう。

さて、先に示したように、日本の文献で使われる「変化」の意味は、大きく分けて「姿が変わること」「姿が変わった者」という意味と「物事の状態が変わること、あるいは変えること」という意味の二種がある。「変化」は本来、中国文献に使用される語である。そこで、本稿では、中国の「変化」の意味と、日本の「変化」の意味を比べ、日本の「変化」と中国文献の「変化」との関係について検討する。さらには、日本の文献を対象に、「変化」の意味の移り変わりについても検討する。

二 中国における「変化」

まず、中国の漢籍や仏典を対象に、変化の意味について検討する。漢籍は、日本の上代文献よりも成立時期の早い漢籍のうち、『史記』『漢書』『文選』を取り上げる。

二―一 漢籍の「変化」

二―一―一 『史記』の「変化」

『史記』⁽⁵⁾で使われる「変化」には、次に示すように動詞の意味

としては、「変わる」「変える」のように自動詞の意味と他動詞の意味があり、名詞の意味としては「物事の移り変わり」という意味がある。

(1) 「物事の形が変わる」という意味

後掲の用例1は、「老子が説く道は空虚で、原因によって対応するもので、何もしないことで形が変わるのである」という意味で、「変化」の意味は「変わる」である。2は、「万物は変わり続け、休む時はない」という意味で、「変化」の意味は「変わる」である。

1 老子所貴道、虚無、因応変化於無為、（老子韓非列伝第三史記八 列伝一 75頁1行目）

2 万物變化兮、固無休息。斡流而遷兮、或推而還。形氣転続兮、變化而嬗。（屈原賈生列伝第二十四 史記九 列伝二 359頁1行目）

(2) 「物事が形を変える」の意味

後掲の用例3は、「樂は、内は己の正しい心をたすけ、外は貴賤の異なりを正しくし、上は宗廟に事え、下は庶民に親しまれて人心を変える」という意味で、「変化」の意味は「変える」である。後掲の用例4は、「日が中天から西に移動し、月が満月か

ら欠けて行くように、物は盛んになった後、衰え行く。それが、天地の常道であるように、出処進退を時勢に従って変えることは、聖人の常道である」という意味で、「変化」の意味は「変える」である。後掲の用例5は、「叔孫通は出世を望み、仕事を測り、礼を制定し、出処進退については時勢に応じて変え、ついに漢王朝の学問の創始者となった」という意味で、「変化」の意味は「変える」である。

3 故楽所以内輔正心而外異貴賤也、上以事宗廟、下以變化黎庶也。(史記四 八書 樂書第二 93頁8行目)

4 中則移、月滿則虧。物盛則衰、天地之常數也。進退盈縮、與時變化、聖人之常道也。(史記九 列伝二 范雎蔡沢列伝第十九 207頁7行目)

5 叔孫通希世度務、制礼、進退與時變化、卒為漢家儒宗。(劉敬叔孫通列伝第三十九 史記十 列伝三 360頁7行目)

(3) 「物事の移り変わり」の意味

後掲の用例6の「変化」は名詞的用法で、「物事の移り変わり」という意味を表す。「君子が国を治めるには、上古のことで見て、これを当世に試み、人事については、盛衰する理を觀察し、権勢の宜しきを審らかにして、何を去り、何に就くべきかの順序が明らかになって、物事の移り変わりが時勢になかった」という意味である。

6 是以君子為国、觀之上古、驗之当世、參以人事、察盛衰之理、審權勢之宜、去就有序、變化有時、故曠日長久而社稷安矣。(史記一 本紀 秦始皇本紀第六 394頁12行目)

二——二 『漢書』の「変化」

『漢書』の「変化」には、動詞的な意味としては「物事が形を変え」という意味を表わし、名詞的な意味としては「物事の移り変わり」という意味を表す。動詞の他動詞意味はないが、これは内容上、使われる場面がなかったためと考えられるので、変化の意味は、『史記』と同じであるといえよう。

(1) 「物事が形を変える」の意味

後掲の用例1は、「山沢は気を通じ、その後、形を変えることができる」という意味で、「変化」の意味は「物事が形を変える」である。後掲の用例2は、「宣帝の黄龍元年に、未央宮の輜輪の中で雌鶏が化して雄鶏になり、羽毛が生え変わり、鳴かず、群れをひきつれず、秩序が無かった」という意味で、「変化」の意味は「物事が形を変える」である。ただし、この例の「変化」の主語は「毛衣」で、雌鶏の羽毛という具体的な事物であって、「陰陽」「万物」といった抽象的な物事をとり、時の移り変わり

を意味する他の例の「変化」とは、意味に違いがあるように思われる。後述するが、日本の「変化」は、「有情物が姿形を変える」という意味を表すが、有情物が姿形を変えるところという意味と、用例2の「変化」の意味は日本の「変化」の意味という点では、用例2の「変化」の意味は日本の「変化」の意味に似ている。後掲の用例3は、「万物が形を変えて、留まる時が無い」という意味で、「変化」の意味は「物事が形を変える」である。後掲の用例4は、「形と気は転成し続けて、物事が形を変えるのは、虫が羽化することに似ている」という意味で、「変化」の意味は「物事が形を変える」である。

1 山沢通気、然後能變化、(卷二十五郊祀志第五下 332頁下右5行目)

2 宣帝黃龍元年、未央殿輅輪中雌雞化為雄、毛衣變化而不鳴、不將、無距。(卷二十七 五行志第七中之上 341頁下右4行目)

3 万物變化、固亡休息。(卷四十八 賈誼伝第十八 548頁上左4行目)

4 形氣転統、變化而嬗。(卷四十八 賈誼伝第十八 548頁上左6行目)

(2) 「物事の形の移り変わり」の意味

後掲の用例5は、「それゆえ陰陽が万物をそだて、万物の終わ

りも始めもすべて、すでに律呂にゆきわたり、日月星辰を経めぐり、物事の移り変わりの情景を見ることができるという意味で、「変化」の意味は「物事の移り変わり」である。後掲の用例6は、「およそ天地の総数は五十五あって、この数が天で間の物事の移り変わりを形成し、鬼神陰陽の作用の要因となる」という意味で、「変化」の意味は「物事の移り変わり」である。後掲の用例7は、「歐陽・大小夏侯の三家は六宗を説いて、上は天に及ばず、下は地に及ばず、かたわらは四方に及ばず、この六者の間にあつて、陰陽の移り変わりを助け、実は一でありながら名は六で、名実が相応しない」という意味で、「変化」の意味は「物事の移り変わり」である。後掲の用例8は、「そもそも物事の形の移り変わりの後は、かならず旧とは異なる恩徳があることは、賢君・聖人が天命を昭らかにするという根拠になる」という意味で、「変化」の意味は「物事の移り変わり」である。

5 故陰陽之施化、万物之終始、既類旅於律呂、又經歷於日辰、而變化之情可見矣。(卷二十一 律曆志上 234頁下左5行目)

6 天數二十有五、地數三十、凡天地之數五十有五、此所以成變化而行鬼神也。(卷二十一 律曆志上 240頁上右10行目)

7 歐陽、大小夏侯三家説六宗、皆曰上不及天、下不及墜、旁不及四方、在六者之間、助陰陽變化、實一而名六、名実不相応、(卷二十五郊祀志第五下 312頁下右2行目)

- 8 夫継變化之後、必有異旧之恩、此賢聖所以昭天命也。(卷五
十一 賈鄒枚路伝第二十一 583頁上左6行目)

二―一―三 『文選』の「変化」

『文選』の「変化」には、動詞の意味として「物事が形を変える」と、名詞の意味として「物事の形の移り変わり」がある。これらの意味は、先に述べた『史記』や『漢書』と同じである。ただし、後に述べるように、『文選』には、「物事が形を変える」の意味のうち、具体的な有情物を主語にとる例が多いという特徴がある。

(1) 「物事が形を変える」という意味

後掲の用例1は、「万物はその形を変えて、止まることはない」という意味で、「変化」の意味は「物事が形を変える」である。後掲の用例2は、「臂を組んで守っても、物事が形を変えることを止められない」という意味で、「変化」の意味は、「物事が形を変える」である。

後掲の用例3は、「四季がかわるがわる形を変えて、歳の暮となるのもまことに早いものだ」という意味で、「変化」の意味は、「物事が形を変える」である。

後掲の用例4は、「変化」の主語が、具体的な有情物となる例で、「形を変える神龍のよう、至尊の尊さをきわだてる」とい

う内容である。「変化」の意味は「物事が形を変える」であり、主語は「神龍」である。

1 万物變化兮、固無休息。(文選 鵬鳥賦 賦篇下 103頁8行目)

2 交臂久變化、伝火迺薪草。(文選 孫廷尉 詩篇下 74頁7行目)

3 四時更變化、歳暮一何速。(文選 古詩十九首 詩篇下 565頁3行目)

4 若神龍之變化、章后皇之為貴。(文選 西京賦 129頁2行目)

(2) 「物事の形の移り変わり」の意味

後掲の用例5は、「陰陽の形の移り変わりに感じる」という意味で、「変化」の意味は、「物事の形の移り変わり」である。後掲の用例6は、「天命はめぐり流れて物事の形の移り変わりは一様ではない」という意味で、「変化」の意味は、「物事の形の移り変わり」である。用例7は、「利を求める情は同じであっても、利を得る形の移り変わりは一つではない」という意味で、「変化」の意味は、「物事の形の移り変わり」である。

5 感陰陽之變化兮、(文選 賦篇下 洞簫賦 265頁3行目)

6 然命体周流、變化非一。(文選 文章篇下 弁命論 317頁1行目)

7 此則殉利之情未嘗異、變化之道不得一。(文選 賦篇下 広絶交論 345頁6行目)

二―二 仏典の「変化」

次に仏典を対象に、「変化」の意味を確認する。

仏典には動詞的な意味としては「姿を変える」「物事の状態や性質が変わる」という意味が認められ、また名詞を修飾し「物事の状態や性質が変わる性質」という意味の「変化性」や「菩薩や・仏が姿を変えた者」という意味の「変化人」というような派生名詞を作る。

漢籍と仏典の「変化」を比べると、「物事の状態や性質が変わる」という意味は共通するが、「姿を変える」という意味は仏典特有である。特に仏典では、仏の力によって、人も含め、種々のものが別のものへと姿を変えろという意味で「変化」が多く使用される。また、「変化」が名詞を修飾し「変化人」といった派生名詞を作ることにも仏典の「変化」の特徴として挙げられよう。この「変化」の用法は、日本の文献にも、用例を見ることが出来る。

(1) 「姿や形を変える」という意味

用例1は、「妙音菩薩はこのように種種の形に姿を変えて身を現じて、この娑婆国土に在って諸々の衆生の為にこの經典を説く」という意味で、「変化」の意味は「菩薩・仏が姿を変える」という意味である。用例2は、「是の諸の衆鳥は、皆是、阿彌陀佛が、法音によって宣流させようと思つて、姿を変えたものである」という意味で、「変化」の意味は「形を変える」である。用例3は、「二一の金色、その寶土に徧し、人は形を変えて或いは眞珠網と作り、或いは雜華雲と作つて、十方面において意に隨いて、形を変えて佛事を施作す」という意味で、「変化」の意味は「形を変える」である。

1 是妙音菩薩。如是種種。變化現身。在此娑婆国土。為諸衆生。說是經典。(妙法蓮華經 妙音菩薩品 第二十四)⁽⁸⁾

2 是諸衆鳥皆是阿彌陀佛欲令法音宣流變化所作(仏説阿彌陀經)⁽⁹⁾

3 一一光、作八万四千 異種金色。一一金色、徧其寶土。處處變化、各作異相。或為金剛臺、或作眞珠網、或作雜華雲。於十方面、隨意變現、施作佛事。是為華座想、名第七觀。佛告阿難、如此妙華、(仏説觀無量壽經)⁽¹⁰⁾

(2) 「物事の状態や性質が変わる」という意味

用例4は、「善悪の状態や性質が変わる」という意味であり、「変化」の意味は「物事の状態や性質が変わる」である。

4 人在世間愛欲之中獨生獨死獨去獨來當行至趣苦樂之地

身自當之無有代者 善惡變化 殃福異處 宿豫嚴待 當獨趣入(仏
説無量壽經 卷下)⁽¹⁾

(3) 「変化性」という形で使われるもの

用例5は、「為変化性」という表現で、「火は光があつて物事の状態や性質が変わるといふ性質を有するようになる」という意味を表す。「変化」に接尾辞的な漢語「性」が付加し派生語となった例である。

5 堅覺宝成揺明風出、風金相摩、故有火光為變化性(大仏頂

如来密因修証了義諸菩薩萬行首楞嚴經⁽¹²⁾ 卷四 32頁5行目)

(4) 「変化人」という形で使われるもの

用例6は、「若し人が悪の刀杖及び瓦石を加へようとすれば、菩薩・仏が姿を変えた人を遣はして衛護とさせよう」という意味である。「変化」に接尾辞的な漢語「人」が付加し派生語となった例である。

6 若人欲加惡 刀杖及瓦石則遣變化人 為之作衛護(妙法蓮

華經 法師品 第十)

三 日本文献の「変化」

日本文献に目を転じると、平安時代の和文に「変化」の例を見出すことができる。

三―一 『源氏物語』の「変化」

まず、平安時代の代表作品である『源氏物語』の「変化」の例を挙げ、意味を確認しておく。『源氏物語』の「変化」は、名詞を修飾して「変化の人」「変化の工匠」「変化のもの」「変化の身」のように使われたり、「変化」単独で名詞として使われたりする。

後掲の用例1の「変化」は、「神仏が人間の姿となって現れる」という意味である。頭注には、「仏・菩薩が人間の姿で現世に現れたとして、源氏の偉大さをたたえている」とある。用例2は、明石入道から娘の明石の君へ送られた文の例である。

『新編日本古典文学全集』の頭注に「変化は、神仏が人の姿を借りて仮にこの世に現れたもの。入道の娘であることを忘れ、一途にわが宿運の開運に努めよ、という」とある。明石の入道は、明石の君が自分のことを、神仏の化身であると考えて、生

きてほしいという願いを文書に認めている。用例3の「変化」は、薫の会話文中に使われた例で、「花を降らせた工匠」の人をさす。すなわち、通常ではない、神仏が人に化してこの世に現われ出でたものをいう。この「変化の人」は、先に述べた仏典の「変化人」と同じ形であり、『源氏物語』の「変化」が、仏典を出自とすることをうかがわせる。用例4の「変化」も、「神仏が人の姿に化してこの世に現われ出でたもの」をいう。亡くなった大君に似た形代を作る工匠を薫が求めているのである。薫は大君の面影を追い求めている。しかし、このようなことができる工匠は、「神仏の変化」としかあり得ないので「変化の工匠」という表現を用いたのであろう。

用例5は、末摘花邸に仕える女房達が発した言葉で、源氏に命ぜられて末摘花を探索する惟光のことを、狐が人に姿を変えたものと思っている。ここでの変化の意味も「何かが姿かたちを変えたもの」という意味である。

用例6と7は、「変化す」という漢語動詞で使われた例である。ここでは、いずれも「狐が人に姿を変える」という意味である。これらの「変化」の意味には、「人の姿に変わる」という意味と、「人力とは異なる力を持つ」という意味が想定できるが、人に害を及ぼし、人から恐れられる「怪物」として、マイナス評価の意味を表す「変化」の意味は認められない。

このように『源氏物語』の「変化」は、名詞を修飾したり、

単独で名詞として使われたりするが、いずれも「何かが人の姿に姿を変える」という意味である。その何かとは、人力では計り知れない力を有する「神仏」や「狐」である。この点で、仏典の「変化」の意味を反映しているといえる。「変化する」主体が神仏だけではなく、「狐」もあることが、仏典とは異なる点である。「神仏」が主体となる「変化」はプラス評価の意味であるが、「狐」が主体となる「変化」はプラス評価の意味とはいえない。この点が、仏典の「変化」とは異なる。また、「へんげ」という呉音と、「神仏などが姿を変える」という意味とが結びついていることも予想できる。

(1) 名詞を修飾する「変化」

- 1 仏ぼつ、菩薩ぼさつの変化へんげの身にこそものしたまふめれ。五つごの濁りにご深き世ふかきよになどて生なままれたまひけむまひけむと言ひて、やがて出でたまひぬ。(②蓬生 337頁9行目)
- 2 ただわが身みは変化へんげのものと思しなして、老法師おいほしのためには功德くどくをつくりたまへ。(④若菜上 115頁11行目)
- 3 「そよ、その工匠たくみも絵師えしもいかでか心にはかなふべきわざならん。近き世ちかきよに花降はなふりらせたる工匠たくみもはべりけるを、さやうなる変化へんげの人もがな」と、とさまかうさまに忘れん方なきよしを、(⑤宿木 449頁4行目)

4 「いさや、いにしへの御ゆるしもなかりしことを、かくまで漏らしきこゆるも、いと口軽けれど、変化の工匠求めたまふいとほしさにこそ、かくも」とて、(5)宿木 451頁14行目

(2) 名詞の「変化」

5 内には、思ひもよらず、狩衣姿なる男、忍びやかにもてなしなごやかなれば、見ならはずなりにける目にて、もし狐などの変化にやとおぼゆれど、近う寄りて、(2)蓬生 346頁11行目

(3) 「変化」の動詞的用法

6 「狐の変化したる、憎し。見あらはさむ」とて、一人はいますこし歩みよる。(6)手習 281頁13行目

7 「狐の人に變化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす。(6)手習 282頁7行目

三―二 上代の「変化」

ここでは、『源氏物語』以外の変化の例を見ていく。まず、上代の作品をみると、『古事記』『日本書紀』に「変化」の用例は無く、『万葉集』に次のような例が存する。⁽¹³⁾

1 俗道変化猶撃目 人事経紀如申臂 空与浮雲行大虚 心力
共尽無所寄(巻五 897 山上憶良)

2 右一首大伴宿祢家持悲怜物色變化作之也(巻二十 4484 大伴家持)

1の「変化」は、「移り変わり」という意味で、ここでは、世の中の万物の移り変わりが瞬く間であることをいう。2の「変化」も、「移り変わり」という意味で、ここでは、自然の風物が移り変わることをいう。

このように『万葉集』の「変化」は、歌の中ではなく、漢詩や詞書で使われ、いずれも「物事の形の移り変わり」という意味である。これらの「変化」は、中国の漢籍の『史記』や『漢書』『文選』の「変化」の意味と同じである。したがって、『万葉集』の「変化」は、中国の漢籍の「変化」の意味の影響を受けて、使用されているといえる。

三―三 中古の「変化」

ここでは、『源氏物語』以外の中古の日本文献を対象に、「変化」の意味を確認する。

漢字表記の資料ではあるが、平安時代初期成立の『日本霊異記』に「変化」の例が見られ、いずれも次に示すように「仏菩薩が姿を変える」という意味である。1については、脚注に

「変化」は、仏菩薩が姿を変えて現われることとある。用例2、4は「観音」が「鷲」や「沙彌」に姿を変えするという意味で、3は「菩薩」が「鹿」に姿を変えするという意味である。これらは、仏典の「変化」の影響を受けていると考えられる。

1 智者誹妬变化聖人而現至閻羅闍受地獄苦緣第七(233頁9行目)

2 定知、彼見鷲者、非現實鷲觀音变化。(243頁5行目)

3 妙見菩薩变化示異形顯盜人頭緣第五。(265頁15行目)

4 沙彌者、觀音变化、何以故、未受具戒名為沙彌、觀音亦爾、雖成正覺、饒益有情、故居因位、乞食者、普門示現卅三身也。(294頁1行目)

用例5、用例6は「変化の人」、「変化の者」のように「人」や「者」の修飾語として使われた例で、いずれも「神仏が姿を変えた者」という意味である。頭注(『竹取物語』新編日本古典文学全集21頁)には、「宇津保物語」藤原の君卷に「この御族は、ただ人におはしませず、変化の者なり。夫人のくだりてうみたまへるなり」とあるやうに、神仏が仮にこの世に現れ、人間の姿に変身して生まれた人。『日本霊異記』にも用例が多い。」とある。また、6の例にも、頭注(『宇津保物語』新編日本古典文学全集①74頁)に、「変化の者」は神仏が仮に人の姿となっ

て現れたもの。この子(仲忠)は、兜率天の内院の衆生七人のうちの一人の生まれ代わり。」とある。

なお、用例7のやうに、『三宝絵詞』のやうな説話集においても、「变化人」という表現が見られる。頭注(『新日本古典文学大系』113頁)には、「蟹を持っていた翁は、実は此の女を護ろうとして仏菩薩が姿を変えた化身であったのだとわかった。」とある。

用例8の『枕草子』の「変化のもの」は、初めて出仕した筆者が、宮中で語り合う殿上人や女房たちの姿を見て、「変化のもの」の印象を持ったとする。この「変化」も、「化け物」ではなく、神仏が姿を変えたものである。新編日本古典文学全集の頭注では、「神仏や妖怪などが、殿上人の姿となって現れたもの」とあるが、「妖怪」とする根拠はない。プラス評価であることから、神仏が姿を変えたものという意味だと考えられる。用例9の『栄花物語』の「変化」は、殿上人の子息が陵王を舞う姿を「変化」と見立てたもので、舞う姿やその所作、気品が尋常の人間ではなく、神仏が姿を変えたものと見たのである。新編日本古典文学全集の頭注には、「何物かが人間の姿をかりて現れたやうに見える」とあり、「神仏」とは限らない「何物か」としているが、「神仏」を意識していると見るべきであろう。用例10の例は、「すぐれたる物の変化」としており、プラス評価である。「常は疑はしき鬼神」と対比されているので、この「物の変化」

は神仏が姿を変えたものと見るべきであろう。用例11の例も「変化のもの」は、美しく不思議な簾の女を、神仏が姿を変えたものと見立てたもので、プラス評価である。

これらの中古成立の作品に現れた「変化」の意味は、神仏が人間の姿に変わったことを意味し、人に恐怖をもたらすマイナス評価の「化け物」「妖怪」の意味ではない。プラス評価の「変化」である。『万葉集』の「変化」は漢籍に由来すると考えられるが、和文の「変化」は神仏が姿を変えろという意味なので、仏典に由来すると考えられる。

5 翁、かぐや姫にいふやう、「我が子の仏。変化の人と申しながら、こちら大きさまでやしなひたまへる心ざしおろかならず。」(竹取物語 21頁13行目)⁽¹⁵⁾

6 この子、まして大きに聴くかしこし、変化の者なれば、ただ大人のやうになりて、人の見ゆれば、(宇津保物語 ①74頁10行目)⁽¹⁶⁾

7 又シリヌ翁変化人也ト靈異記ニミヘタリ。(三宝絵詞 巻中113頁16行目)⁽¹⁷⁾

8 われも、「なにがしが、とある事」など、殿上人の上など申したまふを聞くは、なほ変化のもの天人などのおり来たるにやとおぼえしを、候ひ馴れ、日ごろ過ぐれば、いとさしもあらぬわざにこそはありけれ。(枕草子 第17段 312頁9行)

目)

9 この君はありつるよりも小さくおはするに、折れかへり舞ひたまふほど、そこら広き庭に人と見えたまはで、鳥などの翔らんやうに、変化のものやうに見えたまへば、(②栄花物語 巻二十 御賀 368頁14行目)⁽¹⁸⁾

10 「ただすぐれたる物の変化などは、かくこそは通ふわざならぬ、常は疑はしき鬼神の、わざと欺きけるにほひにや」なごのみ、うちかへし思ひ砕くれど、たれかそらには知らん。(松浦宮物語 108頁10行目)⁽¹⁹⁾

11 言ひ消つやうにさだかならぬ御けはひは、違ふところなきしも、変化のもの、まねび似せたらむをこがましきは、罪去りどころなきこそ、(松浦宮物語 109頁14行目)

三―四 中世の「変化」

次に中世の「変化」の意味について確認する。

(1) 『今昔物語集』の「変化」
「変化ス」

- 1 浄居天変化シテ老タル翁ト成ヌ(巻一 三話 58頁1行目)
- 2 美ノ女ト変化シテ来レル也(巻四 八話 281頁12行目)
- 3 我を助ケムトテ変化シ給ケル也ケリト(巻十七 三話 508頁1行目)

- 4 此レハ若シ鬼神ナムドノ変化シタリケルニヤト怖シク思ヒケリ(卷三十 十四話 243頁2行目)
- 「変化ノ者」
- 5 此変化ノ者也(卷三 二二話 241頁3行目)
- 6 心猛キ人ノ為ニハ変化ノ者モ顕ル、事也トゾ人云ケルトナム(卷十 十六話 301頁7行目)
- 7 此ハ変化ノ者ナドノ来リケルナメリ(卷二十四 六話 285頁4行目)
- 8 亦変化ノ者ナドニテモヤ有ケム(卷第二十八 四十話 122頁12行目)
- 「変化有者」
- 9 狐ハ変化有者ナレバ(卷二十六 十七話 460頁2行目)
- 『今昔物語集』⁽²⁰⁾の「変化ス」は、「神仏が姿形を変える」という意味で使われている。「変化ス」の主体は、用例1が浄居天、2が天魔、3が地藏、4が鬼神であり、いずれも、人間に害を及ぼすのではなく助けるために「変化」しているというプラス評価の語として使用されている。したがって、『今昔物語集』の「変化」は仏典に見られる「神仏がこの世に姿を変えて現われる」という意味の「変化」として使われているということがで

きる。

『今昔物語集』の「変化」は、「何かが姿を変えた後の姿」を現す場合、「変化の者」という表現がされている。これも、中古の和文で使われた形である。用例5の「変化ノ者」は、「神仏が人に姿かたちを変えたもの」で、用例6は「何かが天の日に姿を変えたもの」、用例7は「何かが碁の名人に姿を変えたもの」、用例8は、「何かが女に姿を変えたもの」である。何が姿形を変えたのか、その主体が具体的に分からない例も多いが、ほぼすべての「変化」が、神仏が姿を変えたものとして解釈することができる。ただ、用例6については、天に現れた十の太陽のうち九は偽物で、「射ト射ル者掌ヲ指スガ如シ」という養由という武勇の者の力を試すために現れたとする。偽物の太陽は、「草木可堪キニ非ズ、皆枯レ失ヌ。此レニ依テ、国王ヨリ始メテ大臣・百官及ビ民、皆、嘆キ悲ム事无限シ」ともあり、天下国家、人民に害を及ぼすのであり、マイナス評価の意味ともみなし得るところでもあり、まさに、妖怪変化の仕業とも見ることもできる。しかしながら、ここでは、「心猛キ人ノ為ニハ」とあるように、養由の能力が偽の太陽を呼び寄せたというのであり、養由にとってはプラス評価となる。変化した者は、狐や妖怪の類ではなく、神仏であり、それが養由の力を試すために現れたと考えられるところである。

さらに、引用箇所以外のところでは、「人ノ業力ニ依テ有ル事

也」とあり、大系の頭注では、「『仏が一切衆生の過去・現在・未来の諸業果を知る能力』を指すものであらう」(300頁6行目)とあり、仏教思想が色濃く反映された説話であるということが出来る。このように、ここで使われた「変化」は、他の例の「変化」と同じように、仏典の影響のもとに使われたと考えられる。

用例9は、「変化有者」という形で使われた例で、狐が姿を変えている。ここでは、狐が利仁の命に従い、領地に先に行きつき、奥方に憑りついて、主人利仁の命を家臣たちに伝えるという内容である。狐が具体的に何に姿形を変えたということ書かれていないが、「狐ハ変化有者」とあるように、ここでは神仏ではなく、動物や物が姿を変えろという意味である。ただし、ここでの狐は、人間を助ける存在であり、人間に害をなす存在としては表現されておらず、プラス評価の意味である、狐も神仏に準じて扱われ、神通力を持った者として、ここでは神仏のように人間を助けるものとして描かれている。したがって、この「変化」も神仏が姿を変えろという仏典的な「変化」の使い方がなされており、化け物、妖怪の意味での「変化」としては使われていないことになる。しかしながら、プラス評価の意味で使われているにしても、変化する主体が神仏ではなく、狐である点は注意が必要である。このような神仏ではないものが姿を変える例を先駆けとして、後にマイナス評価を表すように

なったものが、化け物、妖怪の意味の「変化」であろうと考える。

また、次の用例10のように、「臨終に際して、神仏が心の形を変える、すなわち涅槃の境地に導く」という文脈で使われた「変化」もある。このような意味の「変化」も、仏典の影響を受けた「変化」であるといえる。

10 致使凡夫念即生、不断煩惱得涅槃とて、終焉の時は、一さ
んいの心を変化して(曾我物語⁽²¹⁾ 423頁6行目)

『平家物語』⁽²²⁾には、化け物、妖怪の意味の「変化」の例が見られる。これらの変化には、「神仏が姿を変える」という意味特徴はなく、姿を変える元の主体を特定するのが困難である。もっぱら、姿を変えた後の異形に焦点が当てられる。そして、得体のしれない恐ろしい化け物、妖怪の意味で「変化」が使われる。もはや、霊験あらたかなプラス評価ではなく、人間に害を与えるマイナス評価の「変化」である。したがって、これらの「変化」は、仏典との関りは薄くなり、日本特有の意味が生じているといえるであらう。

用例11、12、13は、頼政が変化の物を射とめるという内容であるが、「変化」の形は、「其時、下手々に火をともいて、これを御らんじみ給ふに、かしらは猿、むくろは狸、尾はくちなは、

手足は虎の姿なり。なく声鶴にぞにたりける。おそろしなどもをろか也。」(上326頁8行目)と表現されており、まさに妖怪、化け物の類であることが分かる。

用例14の「変化の物ども」については、「或夜入道のふし給へるところに、ひと間にはゞかる程の物の面いできて、のぞきたてまつる。」(341頁4行目)、「岡の御所と申すはあたらしうつくられたれば、しかるべき大木もなかりけるに、或夜おほ木たふる、音して、人ならば二卅人が声して、どとわらふことありけり。」(341頁5行目)、「かくしておほくのどくろどもがひとつにかたまりあひ、つほのうちにはゞかる程にもなて、高さは十四五丈もあるらんとおほゆる山のごとくになりけり。」(341頁4行目)、「其外に、一の厩にたてとねりあまたつけられあさゆふひまなくなかはれける馬の尾に、一夜のうちになぞみ巢をくひ、子をぞうんだりける。」(342頁7行目)などと、複数の例が挙げられている。

用例15は、「現術変化の権化」の例で、「羅刹」と対をなし、いずれも死は逃れられないものであるという意味である。ここでの「変化」も、術を使う化け物、妖怪の意味である。

用例16の「変化の物」はもとは人間であったが、「君も臣も」あなおそろし。是はまことの鬼とおほゆる。手にもてる物はきこゆるうちでのこづちなるべし。いかゞせん」とさはがせおはしますところに」(上477頁5行目)とあり、妖怪や化け物(ここ

では鬼)と見られていることが分かる。

11 「昔より朝家に武士をおかる、事は、逆反の物をしりぞけ、違勅の物をほろぼさんが為也。目にも見えぬ変化の物つかまつれと仰下さる、事、いまだ承及ばず」と申ながら、(上325頁11行目)

12 「変化の物つかまつらんずる仁は頼政ぞ候」とえらび申されたるあひだ、一の矢に変化の物をみそんずる物ならば、二の矢には雅頼の弁のしや頸の骨をみるとなり。(上325頁16行目)

13 さてかの変化の物をば、うつほ舟にいられてながされるとぞきこえし。(上327頁5行目)

14 福原へ都をうつされて後、平家の人々夢見もあしう、つねは心さはぎのみして、変化の物どもおほかりけり。(上341頁2行目)

15 三明六通の羅漢もまぬかれ給はず、現術変化の権者もがれぬ道なれば、有為無常のならひなれども、ことはり過てぞおぼえける。(上388頁3行目)

16 くまれて、「こはいかに」とさはぐ。変化の物にてはなかりけり。はや人にてぞ有ける。(上417頁13行目)

中世成立の作品では、『平家物語』の他にも、次のように、妖怪や化け物の意味の「変化」が、多く見られる。このことから、

マイナス評価の意味を持つ妖怪・化け物の意味の「変化」は、中世頃から、特に説話や軍記物語で使われ始めたとみられる。

17 は、「魔が猫に姿を変えた」という内容である。『全集』の頭注によれば、「神仏などがかりに生あるものの姿になって現れること」とするが、ここでは「神仏」ではなく「魔」が主体である。18の「変化」も、動物などが姿を変えて現れる妖怪・化け物の意味である。ここでは、「老人」に姿を変えているが、主体が何であるかは不明である。

『古今著聞集』の「変化」

17 この猫、もし魔の变化へんげして、まもりをとりて後、はゞかる所なくをかして侍にや。(473頁6行目)

『宇治拾遺物語』の「変化」
18 「あれは变化へんげのものぞ。我こそ其よ（ま）といへど、き、いる、人なし。(199頁13行目)

御伽草子（25）でも、妖怪・化け物の意味の「変化」が多く使われる。以下、妖怪・化け物としての「変化」の例を挙げておく。

19 いかなる山の奥おくよりか、久しき鉢はちが变化へんげして、鉢はちかづいて化けけるぞ。(鉢かづき 63頁15行目)

20 母上ははうえ仰せけるやうは、「さもあれ鉢はちかづきは、いか様变化へんげの者ものにて若君わかみを失うしなはんと思ふやらん、いかゞせん、冷泉れんぜい」

と仰せける。(御伽草子 鉢かづき 74頁8行目)

21 唐糸からいとは、人音ひとねを聞きつけて、「そもく門かどにをどづる、は、誰たれなるらん。变化へんげのものか。又は唐糸からいとか。討手うつけにばし向むく人か。」(御伽草子 唐糸さうし 138頁2行目)

22 鬼神おんじんは变化へんげの物なれば、討手うつけ向ふと知るならば、塵ちりや木（こ）の葉（は）と身（み）を變へんじ、我（われ）ら凡夫ほんぶの眼（まなこ）にて、見みつけん事はかたかるべし。(御伽草子 酒呑童子 363頁16行目)

ただし、仏教の内容と深く関わる話では、「神仏が形を変えろ」という意味で、プラス評価の「変化」も使われている。

23 「まことにさも候はゞこの人は菩薩ぼさつの变化へんげなり。」(三人法師 445頁1行目)

24 「サテハ若公ノ身ヲ擲なげ 玉フモ観音ノ变化也(秋夜長物語 484頁3行目)

また、25の例のように、漢籍の「変化」に見られる「物事の形の移り変わり」という意味の「変化」も使われている。「変化の理」とは、「この世が移り変わっていくものであるという道理」という意味である。この例の「変化」の読みは、漢字表記

のため不明である。『新編古典日本文学大系』の校注では、「ヘンゲ」と読んでいる。

25 まどへるものはこれを、それず、名利におぼれて、先途の近き事をかへり見ねば也。をろかなる人はまたこれを悲しふ。常住ならんことを思ひて、変化の理をしらねば也。(徒然草 第74段)

三―五 古記録・古文書類の「変化」

次に古記録や古文書類の「変化」の意味について確認する。⁽²⁶⁾

古記録や古文書類の「変化」には、「物事が他の形や状態に変わる」「神仏が人に姿を変える」「動物などが別のものに姿を変える」という意味を表す例が認められる。「物事が他の形や状態に変わる」という意味は、漢籍の「変化」と同じ意味である。

また、「神仏が人に姿を変える」という意味は、仏典と同じ意味である。しかし、「動物などが別のものに姿を変える」という意味は、日本特有の意味である。おそらくこの意味は、「神仏が人に姿を変える」という意味の「神仏」という主体を「動物」に変えて生じた意味であろうと思われるが、主体を「神仏」から「動物」に変えたことで、靈験のようなありがたさや信仰の対象ではなく、得体のしれない恐ろしい存在へと意味が変わったのであろう。つまり、プラス評価からマイナス評価の語へと意味

が転じたことになる。

「物事が他の形や状態に変わる」

1 但人波受天地之變化弓、次第相応之弓形骸乃成礼里、可為女加良牟乎可転男止、非可祈須、非可請須、身体無恙之弓平安令遂須、為大慶弓待方来牟、(岡屋関白記 寛元四年四月二三日)

2 去年八城へ吾々滞在中、御当家和龍和平之儀媒介共候、成就之様に候処、隆信不慮二變化候て、于今無首尾候、(上井覚兼日記 天正十二年五月二十二日)

3 雖縦世上變化候、両家之事、不入敵案、弥可申合候、(相良家文書之一 三四二 阿蘇惟前起請文)

4 元就、隆景、元春御覚悟於無變化者、為宗麟聊不可相違候、若此旨偽申候者(吉川家文書之一 六九 大友宗麟起請文写)

1 の例は、天地の状態が変わるのに応じて、妊娠中の子が女子になったり男子になったりするものだという意味である。ここでの「変化」は、天地の状態が変わることを表している。2 の例は、秋月家の種実が、龍造寺家と島津家の講和を仲介したところ龍造寺隆信の思わぬ心変わりによって不首尾に終わったという内容である。ここでの「変化」は、人の心が変わることの意味している。3 の例は、惟前から義滋へ当たった起請文で、世上が変わっても、両家が敵対しないことを約した内容の書状

である。ここでの「変化」は、「物事が他の形や状態に変わる」という意味である。4の例は、大友宗麟から毛利氏に当てた起請文で、元就、隆景、元春が確かに心変わりのないことを示したので、宗麟がこれを受け和睦の起請文を出したものである。これらの「変化」は、その意味からすると、漢音で読むのかもしれない。

「神仏が人に姿を変える」

5 又宣謂、彼位者、相階妙覚朗然之位、弥陀仏變化御身也
(石清水文書之五 宮寺縁事抄 第一末 阿弥陀 年代未詳)

5は、阿弥陀の本地を説いたもので、託宣により、和氣清麻呂の受職灌頂の位が、阿弥陀仏の変わった躰であると説いている。ここでの「変化」は、「物が別のものに姿を変える」という意味である。「変化」の読み方の詳細は不明であるが、意味から考えると、呉音の「ヘンゲ」であった可能性が強いと考える。

「動物などが別のものに姿を変える」

6 彼人云、此間越中国無尾之鼠出来、大略變化者歎、青苗并麥隴皆以喰損之云々、(天福元年四月二十九日)

7 和尚云、於室町殿女房髮近年切之性異事、為何者之所為哉
不審之処、近比見洛陽伽藍記之処狐之所為也、及百卅人切之

事有先例也、狐者拜北斗如此變化歎、所詮北斗歎尊星王歎、
何様就星被修其法有祈念者可然哉、其物之所為と已覚知スル
時ハ、其物不成變化事也、天狗なども皆不可尽ト云事あり
(建内記 嘉吉四年二月七日)

6の例は、「ある人が語ったところによると、越中の国で尾の無い鼠が出現して、青苗并麥を喰い尽くした、この鼠は変化であろう」という内容である。7の「変化」は、狐が人に変化して、宮中の人の髪を切ったという内容である。ここでの「変化」の意味も、「動物などが別のものに姿を変える」という意味である。これらの「変化」は、世に害を及ぼす妖怪、化け物の意味である。これら「動物などが別のものに姿を変える」という意味でマイナス評価の意味を表す「変化」は、管見に入る限り用例6の天福元年(一二三三年)が初出である。このことから、化け物、妖怪の意味の「変化」は、中世以後に成立したのではないかと考えられる。

また、『鎌倉遺文』によって、鎌倉時代の「変化」の例を見ると、先に古記録や古文書で挙げた意味と同じ「変化」の例を見出すことができる。鎌倉時代の「変化」の意味は、(1)「神仏が人に姿を変える」という意味と、その「神仏」という変化の主体が(2)「神仏以外の動物など」になった意味と、(3)「物事の形が移り変わる」という意味の三種類である。今まで述べ

てきたように、(1) は仏典に通じる意味であり、(2) は(1) から転じて、日本で、「化け物、妖怪」を表すマイナス評価になった「変化」であり、(3) は漢籍に由来する「変化」である。これら三種類の意味の「変化」が、例えば仏教思想を述べた内容では(1)の意味の「変化」が使われるといったように、文章の内容に応じて使用される「変化」の意味が違うという状況を見ることが出来る。ここでは、それぞれの意味の変化について、用例を示すだけにとどめる。

(1) 「神仏が人に姿を変える」という意味

8 随類變化之形、暫入日域之王宮、和光同塵之姿、儉愛金輪之帝図、名雖為人間聖武之君、実豈非普門示現之聖哉。(第三卷 一一九七 東大寺僧綱等解案 建仁元年四月 11頁下13行目)

9 法師品云、則遣變化人、為之作衛護、疑あるへからず。(第十四卷 文永8年9月21日 306頁上6行目)

(2) 「神仏以外の何ものが姿を変える」という意味

10 マタ五説トイフハ、ヨロツノ経ヲトカレ候ニ、五種ニハスキス候ナリ、一二ハ仏説、二ニハ聖弟子ノ説、三ニハ天仙ノ

説、四ニハ鬼神ノ説、五ニハ變化ノ説トイヘリ。(第十一卷 八〇八九 親鸞書状 正嘉元年 閏3月2日 216頁下1行目)

11 若彼變化のしるしを信ぜば、即外道を信をまぬがれず況や、はづかの變化にをいてをや(第十三卷 九八一 日蓮書状 文永4年12月5日 305頁上17行目)

(3) 「物事の形が移り変わる」という意味

12 但人波受天地之變化_ト、次第相応之豆形骸乃成礼里(第九卷 六六六八 関白近衛兼経告文 寛元4年4月23日 274頁下11行目)

13 この有為變化の身ハ、夢のことで、まほろしのことし、水の上のあはに似たり。鏡の上の影像にことならず。人うまれてかならず滅す。楽あれハかならず苦あり。あひては又離、これ人間のならひ、更にこれをのかるへからず。(第九卷 六七三 九条道家願文 寛元4年7月16日 312頁上16行目)

四 お わ り に

以上、本稿では、『源氏物語』等の和文の中で名詞や動詞として使われている「変化」という漢語を取り上げ、中国文献との

意味の違いや日本での意味について検討した。その結果、中国文献において漢籍と仏典では、「変化」の意味に違いが認められることが分かった。また、日本で使われる「変化」は、中国文献の仏典と漢籍の意味を受け入れていることがわかった。平安時代成立の和文では、仏典に由来する呉音読の「へんげ」のみが使われている。その後、仏典に由来する「変化」は、説話や軍記物語、古文書、古記録類において、「化け物、妖怪」の意味に転じ、中世以後、多用されるようになった。仏典の「変化」を受け入れた当初の「変化」は霊験あらたかなプラス評価の語であったが、主体が「狐」などに変わる例が増えた結果、人間世界に害を及ぼす化け物、妖怪の意味に転じていったのである。

このように漢語「変化」の意味を、中国との比較、日本での時代的变化という観点でみると、「変化」の意味変化は、漢語の和語化の例としてみることができる。

注

- (1) 以下、『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館)によった。
- (2) 前田本色葉字類抄には、「疊字 付」に「ハンクワ」とある。「ハシ」とあるのは、「ハ」を「ハ」と誤写したと考えられる。(前田本 上五三裏5行目) (『色葉字類抄 研究並びに索引』中田祝夫 峯岸明 共著 風間書房 一九六四)
- (3) 『改訂新版 文明本節用集 研究並びに索引 影印篇』(中田祝夫

勉誠社)によった。

- (4) 『邦訳日葡辞書』(土井忠生 他 編訳 岩波書店 一九八〇)による。
- (5) 本文は、『新釈漢文大系』(明治書院 一九七三～二〇一四)によった。
- (6) 本文は、『和刻本正史3・4』(汲古書院 一九七三)によった。
- (7) 本文は、『新釈漢文大系』(明治書院 一九六三～二〇〇一)によった。
- (8) 本文は、『国訳大藏経「復刻版」経部』(第一書房 一九七四)によった。
- (9) 本文は、『国訳大藏経「復刻版」経部』(第一書房 一九七四)によった。
- (10) 本文は、『国訳大藏経「復刻版」経部』(第一書房 一九七四)によった。
- (11) 本文は、『国訳大藏経「復刻版」経部』(第一書房 一九七四)によった。
- (12) 本文は、『国訳大藏経「復刻版」経部』(第一書房 一九七四)によった。
- (13) 本文は、『新編日本古典文学全集 万葉集』(小学館)によった。
- (14) 本文は、『新編日本古典文学大系 日本霊異記』(岩波書店)によった。
- (15) 本文は、『新編日本古典文学全集 竹取物語』(小学館)によった。
- (16) 本文は、『新編日本古典文学全集 宇津保物語』(小学館)によった。
- (17) 本文は、『新編日本古典文学大系 三宝絵詞』(岩波書店)によった。
- (18) 本文は、『新編日本古典文学全集 栄花物語』(小学館)によった。
- (19) 本文は、『新編日本古典文学全集 松浦宮物語 無名草子』(小学館)によった。
- (20) 本文は、『日本古典文学大系 今昔物語集』(岩波書店)によった。

- (21) 本文は『新編日本古典文学全集 曾我物語』(小学館)によった。
- (22) 本文は『日本古典文学大系 平家物語 上下』(岩波書店)によった。
- (23) 本文は『日本古典文学大系 古今著聞集』(岩波書店)によった。
- (24) 本文は『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』(岩波書店)によった。
- (25) 本文は『日本古典文学大系 御伽草子』(岩波書店)によった。
- (26) 検索は、東京大学史料編纂所データベースによった。

The Meaning of the Word “henge/henka (变化)”

—By Comparing Chinese Books and Buddhist Texts—

Yasushi YUNOKI

Abstract

In this paper, we compared the Chinese and Japanese meanings of the word “变化”, and considered how the meaning changed in Japan. The Japanese word “变化” came from Chinese. The meaning of the Chinese word “变化” was “change of event” and “change of Buddha”. The meaning of the word “变化” in Chinese books was “change of event” and its meaning in Buddhist texts was “change of Buddha”. The Japanese word “变化” had the same meaning as the Chinese word “变化”. However, in Japan, the word “变化”, which means “change of events”, was read as “henka”, and the word “变化”, which means “change of Buddha” was read as “henge”. Until the Japanese Chuko period, the meaning of the word “henge (变化)” in Japanese books meant “change of Buddha”, the same as in Chinese books, but after the Chusei period in Japan, its meaning changed to “monster” with a negative image.